

武内 和彦

たけうち

かずひこ



公益財団法人地球環境戦略研究機関理事長、
東京大学未来ビジョン研究センター特任教授

地域生態学、サステナビリティ学

- 昭和49年 東京大学理学部卒業
- 同 51年 東京大学大学院農学系研究科修士課程修了
- 同 52年 東京都立大学理学部助手
- 同 55年 農学博士（東京大学）
- 同 60年 東京大学農学部助教授
- 平成 7年 東京大学アジア生物資源環境センター教授
- 同 9年 東京大学大学院農学生命科学研究科教授
- 同 20年 国際連合大学副学長（平成25年から上級副学長）
- 同 24年 東京大学サステナビリティ学連携研究機構長・教授
- 同 29年 東京大学サステナビリティ学連携研究機構長・特任教授
- 同 29年 公益財団法人地球環境戦略研究機関理事長
- 同 31年 東京大学未来ビジョン研究センター特任教授

- 昭和56年 日本造園学会賞
- 平成 7年 農村計画学会賞
- 同 7年 日本都市計画学会・石川賞
- 同 20年 環境大臣表彰 環境保全功労者
- 同 29年 日本農学賞・読売農学賞
- 同 29年 Otto Soemarwoto Award
- 同 31年 市村賞地球環境学術賞貢献賞

受賞者紹介

「人と自然が共生する社会（自然共生社会）の実現に向けた地域生態学の実践とサステナビリティ学への展開」に関する功績

人類が自然生態系に与える負荷を低減させ環境の持続可能性を高める、人と自然とが共生した社会の実現が、世界的な喫緊の課題となっている。武内氏は、一貫して持続可能性という観点から、国内外の社会—生態システムについて、その仕組みを解明し、地域環境の保全・計画手法を開発・提案してきた。

武内氏がまず取り組んだのが、生態学的土地評価や土地利用及び環境管理計画手法の開発である。武内氏は、土地自然の持つ多様な潜在力を生かしながら環境保全的な土地利用を進めるための計画体系を検討し、フィールド調査と環境情報システムを組み合わせた客観的で定量的な環境保全機能の評価に基づく、総合的な地域環境管理計画を提案した。この計画手法は、神奈川県逗子市に導入されるなど、その後の自治体での地域環境管理計画の取組に先鞭をつけることとなった。また、これらの研究と実践の成果を体系化し、緑地学や地理学、生態学の視点から地域環境の保全と創出を目指す「地域生態学」という分野を確立した。

武内氏が次に取り組んだのが、地域生態学の実践としての里地・里山研究である。人間活動との関わりによって維持されてきた里地・里山における景観構造の特徴や生物多様性の維持機構を解明し、人の手が入ることにより生態系が保たれることで、自然資源の活用が可能となる「二次的な自然の持続的利用」の重要性を国内外に発信してきた。特に、同研究の成果をまとめた著書「SATOYAMA-The Traditional Rural Landscape of Japan」は、二次的な自然の理解が進まなかった欧米の研究者に、日本の生物多様性の成り立ちや特徴についての知見を浸透させた。さらに、フィールドを海外に広げ、伝統的な土地利用や資源循環の形態とそれを支える社会システムや伝統的な知識の特徴を明らかにしてきた。こうした研究成果に基づき、二次的な自然の保全や再生、伝統的な土地利用の再構築に向けた世界各地の多様な取組との連携を目指す SATOYAMA イニシアティブを主導し、生物多様性条約第 10 回締約国会議（2010 年）で日本政府と国際連合大学が提唱した SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ（IPSI）の設立と運営に大きく貢献した。

武内氏が先導してきたこれらの研究は、持続可能性に関する研究の集大成として、持続的な社会—生態システムの再構築を目指すサステナビリティ学へと展開した。同氏は、2005 年から、東京大学サステナビリティ学連携研究機構（IR3S）の副機構長（2012 年から機構長）として、サステナビリティ学のネットワーク型研究拠点形成を主導してきた。この間、2006 年に創刊された国際学術誌「Sustainability Science」の編集委員長を現在まで務めるとともに、多くの学術書や一般向けの図書を出版して、研究成果の発信に努めてきた。

サステナビリティ学が実を結んだ代表的な成果のひとつが、2011 年に、「佐渡の里山」と「能登の里山里海」が日本初の世界農業遺産（GIAHS）に認定されたことである。武内氏は、SATOYAMA イニシアティブなどの活動を発展させ、FAO（国際連合食糧農業機関）に設置されている科学アドバイザーグループのメンバーとして候補地の掘り起しに深く関わるなど、世界農業遺産認定の活動を学術面から支援することによって、サステナビリティ学の社会実装を大きく後押しした。今日では、新たに日本農業遺産の認定が農林水産省により進められるなど、武内氏が展開してきた持続可能な地域環境づくりに向けた活動の裾野は着実に広がりつつある。

以上のように、武内氏は一貫して、持続可能性の視点から、高い学際性により人と自然が共存可能な社会の実現に向けた研究を強力に先導するとともに、卓越した発信力により多くの業績をあげてきており、その先見性の高い研究と実践の功績は高く評価されるものである。